

タカヤゴウ 高家郷 羽咋郡の古郷名。和名抄では多加也と訓んでゐる。しかし日本地理志料には、信濃に太支倍、佐渡に多加倍又は多介倍と訓んだ例を引いて、多加也の訓を不可であるとしてゐる。所在は詳かでない。

タカヤスキヨ 多賀藤清 通稱主計典膳。實は直方の二男で、祖直定の後を受けて二千石を襲ぎ、人持組に列し、享保十五年定火消に任じ、十六年直方の退隱に際しその祿千石を併せ、合計三千石となり、寛延三年小松城番に遷り、寶曆五年四月罷め、明和六年二月廿二日七十五歳を以て歿。子孫世々藩に仕へる。

タカヤスシヨウ 高安庄 越登賀三州志に、宮樞家國の時、石川郡高安庄野々市に邸を築き、その子信家、その子家近こゝに府を定めたと記し、莊に高安庄は古庄號であらうが、今はその名がないとしてゐる。野々市は押野庄であり、更に近代は宮樞庄であるが、野々市にあつた大乘寺の塔頭に高安軒があるから、さうした庄號の存したことがあるかも知れない。

タカヤナギ 高柳 河北郡鞍月庄に屬する部落。  
タカヤナギキチザエモン 高柳吉左衛門 前田利常の時の御歩。或時利常が御歩の姓名の書上をその頭に命じたが、頭は吉左衛門を脱した。利常乃ち吉左衛門に、汝は頭に贈遣を爲さざるによつて憎悪せられてゐると見え。知行百石を興へるによつて、曠き屋敷を受け、櫛を植えてその果實を贈つたならば立身するであらうと言つた。事は異本微妙公夜話に記される。

タカヤナギゴロザエモン 高柳五郎左衛門 貞享二年御歩となり、寶永七年小頭に進んで新知百石を受け、享保八年柳原御前御用人並として組外に列し、三十石を加へ、十九年七十一歳を以て歿。子孫四代五郎左衛門の時天明五年流刑に處せられて斷絶した。

タカヤナギジュンゴ 高柳順伍 鳳至郡熊野眞宗東派光榮寺の侍。一名證空。高倉學寮に學び、寮司に任ぜられ、後見順齋の嗣となつたが、未だ住持せずして明治十四年九月十五日五十二歳を以て歿した。法名上涅院。

タカヤマ 高山 能美郡白峰内の小字。タカヤマカンベ 高山勘兵衛 養父主計は前田利常の臣で三百五十石を領した。勘兵衛越前府中に於いて前田利家に仕へ、三百石を受けた。子孫相續く。

タカヤマケン 高山縣 ↓ケンセイ 縣制。タカヤマゴンゲン 高山權現 ↓オホミネジンジャ 大峰神社。

タカヤマザイバン 高山在番 元祿五年七月廿八日幕府は飛騨高山城主金森頼吉を出羽上山に移し、高山は空城となつたから、八月廿二日老中戸田忠昌より、食封一萬石の軍役に相當する加賀藩の人馬を遣はして屯成せしむべきことを命じた。前田綱紀乃ち馬廻頭永井織部正良、使番平田清左衛門、横目中村伊兵衛を派遣することとし、九月十日正良等に軍令を授け、翌日江戸を發して金澤に歸り、次いで高山に赴かしめたが、上下の數一千餘人であつた。正良のこゝに留ること半歳の後、藤田安勝の部隊之に代り、次いで津田求馬・野村五郎兵衛・山崎源五左衛門各半歳毎に交代したが、元祿八年春和田小右衛門のその任

に當らんとする際、幕府は高山城廢毀の事を命じたので、小右衛門の出發を止め、大小將組奥村市右衛門を廢城の主督たらしめ、作事奉行近藤三郎左衛門・普請奉行前田清八以下を屬せしめてその任務を終つた。

タカヤマザイバンキ 高山在番記 五册。元祿五年八月廿二日前田綱紀が幕府から飛騨高山城の守備を命ぜられてから、毎年藩士を派遣交代せしめ、八年六月廿九日廢城引揚となり、金澤に於いて慰勞の爲能見物を命じたるまでのことを記してある。

タカヤマジヨウズ 高山城圖 金森出雲守頼吉の居た高山城の圖で、前田綱紀の命により畫かしたものだ。城郭惣圖本丸屋形圖二、丸屋形圖二、丸庭樹院殿屋敷圖各一帳、外に飛騨國圖が添へてある。

タカヤマナガフサ 高山長房 通稱右近。諱は長房又は友祥。殖産して南坊等伯といひ、耶蘇教名をドン・ジューストと言つた。南坊はミナミノボウと訓んだのである。攝津高槻城主ドン・ダリオ高山飛騨の子。天正六年長房は荒木村重に黨して織田信長に敵したが、信長はその信仰の自由を興へる條件を以て、十一月之を降せしめた。十年五月長房將に山陽に入つて羽柴秀吉を援けんとしたが、會明智光秀が事を擧げたから、秀吉と尼崎に會して先鋒となり、光秀を討つて功があつた。十一年柳瀬の戦に又秀吉に屬し、中川清秀と乘を列ねて賤岳を守つたが、清秀の敗死するに及び、長房は遁れて木本の羽柴秀長の陣に投じた。是より秀吉は漸く長房を排斥する色があつた。十五年秀吉九州を征し、長房は播磨明石の城主として之に従つた。然るに

この際秀吉は基督教を禁止したので、長房にも改宗を命じたが、長房は之を背せずして遂にその領を奪はれた。長房乃ち小西行長の領小豆島に隠れたが、十六年行長は封を肥後の宇土に移された爲に、有馬晴信の領色有馬に赴いた。既にして秀吉は長房を赦すの意あることを告げたから、長房は命に従つて大坂に赴き、秀吉が徳川家康又は前田利家に臣事せしめんとする意を受けて、長房は利家を選んだ。食封は二萬七千石とも一萬石とも、粟米三萬二千俵とも傳へて、諸書の記する所同じくない。是を以て十八年秀吉の關東征伐の際、長房利家の幕下として之に隨ひ、慶長四年には利長の爲に金澤城を修築し、五年大聖寺の役に出陣し、十四年又高岡城設計の任に當つた。然るに十八年家康の外教を禁止するに當り、長房は改宗を背せずして縛に就いたが、之を報じた前田利常の使札は、十九年正月廿八日を以て駿府に達した。長房、妻ジュスタ・子十次郎と共に金澤を發し、その女の横山康玄に嫁して居たものも、夫に離別して父に隨つた。長房は十一月廿一日(陽曆十二月廿一日)呂宋に着したが、その後四月十日にして猛烈なる熱病に侵され、元和元年正月八日(陽曆二月五日)六十三歳を以て歿した。長房の金澤に於ける住所は、今の石浦神社の向かう、後に岡田氏等の邸地となつたものがそれであつた。津田鳳卿の説に此の地もと大乘寺の寺地であつたといひ、國事昌披問答に長房の舊第を本多安房の邸地とするものは皆非である。

タカラグライシ 寶藏石 ↓オタカラグラ御寶藏。